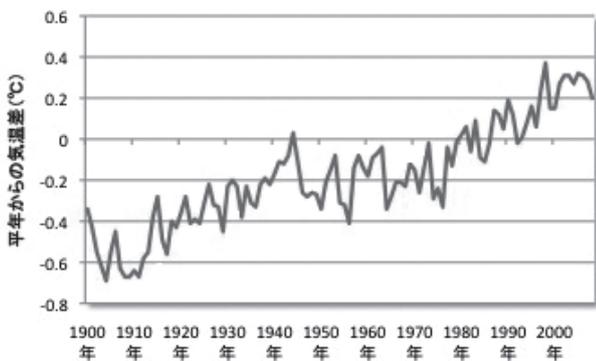


# 地球サミットの双子の姉妹：一石二鳥のエコ・アクションを ～地球温暖化と生物多様性の微妙な関係～

浜田 崇

1992年、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された地球サミットでは、その直前に国連で採択された2つの条約への署名が始まりました。地球温暖化の防止を目的とした「気候変動枠組条約」と生物多様性の保全を目的とする「生物多様性条約」です。これ以降、地球温暖化と生物多様性という言葉は社会の中で徐々に浸透し、今や地球環境問題を代表するキーワードとして多くの人が知る言葉となっています。しかし、地球温暖化と生物多様性に関する問題は、これまで別々の問題として扱われることが多く、両者を関連づけて捉えたり、また両方の問題解決を視野にいれたものは意外に少なかったように思います。



世界の年気温の変化 (1971～2000年の平年値からの気温差で示しています) (データ出所：気象庁ホームページ)

しかし、地球温暖化は生物多様性にも影響を及ぼすといわれています。たとえば、IPCC第4次報告書には、地球の気温が1～3℃上昇すると生物種の20～30%が絶滅の危機に瀕するとされています。また、温暖化によって生物季節が早く進むなど多くの生き物への影響が示されています。長野県においても最近までの約100年間に気温が約1℃上昇し温暖化が進んでいます。これにより、サクラの開花は早まり、カエデの紅葉が遅くなるなどすでに生物へ影響が現れています。今後、温暖化にともなう雪解け時期の変化が高山帯における生態系のつながりを変えてしまうといったような、長野県の誇る自然環境への影響も心配されます。

また、地球温暖化を引き起こす元となっているエネルギーやモノの大量消費が、森林伐採や都市化、乱獲などを招き生物多様性を減少させています。このことは地球の温暖化と生物多様性の喪失の根っこは共通していると



高山帯の雪田

いうことを意味しています。しかし、地球温暖化防止と生物多様性保全のための対策がすべて共通というわけではなく、中には相反する対策もあります。たとえば、地球温暖化対策として二酸化炭素の吸収源を確保するため、成長の早い単一樹種だけを植林したり、木質バイオマスを供給するために強度の伐採を行ったりすることなどです。こうした対策は二酸化炭素の削減にとっては効果的であるにしても生物多様性の保全の観点からは決して好ましくありません。ある樹木だけに炭素を吸収させるのではなく、森林の生態系全体として炭素の吸収力を高めたり、間伐の場所やタイミングを生物に配慮しながら計画的に実施するというスタンスが重要です。



生き物の豊かな二次林

以上のように、地球温暖化と生物多様性にはさまざまな関係があります。こうした関係を踏まえながら生物多様性の保全を進めていく必要があるでしょう。